

(3) ②様式第3号-2 (報告書)

※文字のフォント、大きさは Meiryo UI / 12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。

※写真は、進行プログラムに沿って適宜、右ページに簡単な説明文を添えて貼り付けてください。

※必ず A3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下としてください。

NITS・教職大学院等	実施機関名・連携機関名 大分大学教職大学院
コラボ研修プログラム	事業名：環境の変化に即応する学校の教育実践を探究する ～「令和の日本型学校教育」を担う教職員の役割とは～
支援事業報告書	研修等名：【NITS・大分大学教職大学院コラボ研修】（令和5年度教職大学院セミナー） 環境の変化に即応する学校の教育実践を探究する ～「令和の日本型学校教育」を担う教職員の役割とは～
	開催日時：令和5年7月29日 14:30～17:00 開催場所：大分大学教職大学院（大分市巨野原700番地） 参加人数（総数）と参加者の属性：（48人）本学教員16人、現職教員22人、大学院生10人

内容： ※全体発表の内容をテブ起こしするなど、具体的に記載してください。研修等の様子は、写真を右に貼り付けてください。

本教職大学院セミナーは、報告①②、グループ・ディスカッション、講評・指導助言①②で構成された。

報告①では岡田豊校長（佐伯市立米水津小学校）から、「複式学級を新設せざるを得ない状況の中で、『コア・システム』を導入して、全職員の動きを調整しやすい仕組みを作って対応した。」ことの報告があった。職員の動きの見えやすさは、相互の働きやすさにつながり、信頼関係の高まりをもたらした。同じ小学校でも所在する地域によって大きく実態が異なるため、常にアンテナを張って実践事例や有効な理論に敏感である必要性が指摘された。同じく、地域の特性を生かした学校経営や地域との緊密な連携も校長のリーダーシップの発揮しどころであり、それが教育課程に反映されることで児童が地域で育つ姿が明確になることが具体的に示された。

報告②では、宮重拓歩氏（教職大学院学卒院生）から、オートエスノグラフィーという研究手法を用いて、実習校での自身の姿を「学級経営への参画」という観点から、できる限り客観的に分析しようとする試みが報告された。宮重氏は、実習生という立場と実習参加の時間的制約の2つの課題と向き合いつつも、学級経営参画の舞台を「特別活動」とし、担任教師との対話や児童との関わりを介して、実習生（学卒院生）であっても学級経営に意味ある存在となり得ることを示していった。しかし、それには裏付けが必要であり、それを教職大学院のゼミにおける指導教員等を交えた省察によって、意味づけに客観性が付与されていくプロセスについても説明があった。教職大学院だからこそ可能になる意欲的な実践研究報告であった。

（紙幅の関係で、グループ・ディスカッションと講評・指導助言は次頁にて報告する。）

成果： ※参加者の声など客観的な情報・データとともに記入して下さい。

今回のセミナーには初めて他大学の専門家を招き、コメンテーターとして力添えをいただいた。それが新鮮だったようで「コメンテーターの解説が有益であった」が65%の評価を得た。半数以上の評価を得た項目は「学校経営の最前線の話が有益だった」「在学生の研究への取組状況に刺激を受けた」「発表者と質問者のやりとりが有益であった」となった。一方で、自由記述には「グループ討議の時間がもう少し欲しかった」（3名）、「2名の教授（コメンテーター）の専門的な話をもっと聞きたかった」（2名）などが複数の参加者からいただいた。

高評価の要因となったコメンテーターの招聘については、NITS・教職大学院等コラボ研修プログラム支援事業のお陰に他ならず、地方の教育界の研修の質を高めるための支援に感謝したい。

アイデアや工夫したこと： ※3～5つ程度の箇条書きしてください。

- ・コメンテーターを他大学の専門家に任せることで、本学教員はフロアーにいて参加者（現職教員・大学院生）とともに学びを深める役割に徹した。
- ・報告者のひとりを学卒院生にすることで、現職教員に対して「教職大学院の意義（学卒院生が教員になることの意味）」や「学校での期待」について再考してもらおうとした。
- ・今回のセミナーは敢えて対面のみで開催し、17時終了という時間設定とした。大学食堂での軽食をともなう交流会も企画し、26名もの参加者が得られ、とても有意義な情報交流の時間となった。

<写真・図など> ※会場の熱気や規模がわかる写真、参加者の表情がわかる写真（寄って撮影またはトリミング）を撮影してください。

岡田校長の報告では、特に地域特性や学校規模に応じた学校経営の在り方について関心が集まった。地域との連携を図る際に、地域プライドをくすぐることが、地域の気持ちに火をつけることになり、それが児童にも波及することが質疑応答により確認できた。前任校ではそれが川とカヌーであり、実際に国際レベルのカヌー選手がそこでは輩出されており、カヌーを通して地域と児童・学校が強固につながった好事例を、当事者の心の動きを含め裏舞台とともに話してもらえた。



(左)岡田校長の報告 (右)院生による質問

学卒院生の宮重氏の報告についてはすでに〔内容〕のところでも述べた通りである。この報告に関しては、圧倒的に現職教員の食いつきがよかったように感じた。（実際に、その後のグループ・ディスカッションの時間の多くが宮重報告に関するもので占められていた。）学級経営に参画する教育実習生という構図が、にわかには現実とのギャップと結びつかなかったことにあるようだった。もちろん、教職大学院生という特殊性は、通常の大学3～4年生とは学修内容も大学院の指導体制も大きく異なっている。一方で、参加した現職教員は、教育実習の在り方の根本を問い直すことも含めて、この研究報告を聞いた意義があったと述べた。



(左)若手教員による質問 (右)宮重氏の報告

ふたつの報告を受けて、グループ・ディスカッションの時間に入った。グループ構成は、所属や役職、年代等に配慮して割り振りを行った。ファシリテーターは教職大学院の教員が務めることとし、限られた時間にすべての人が公平に参加・参画できるように配慮しながら進行してもらった。発表の中で事実確認をしたい部分、もう少し背景説明を補足して欲しい部分、研究方法の妥当性について確認したい部分、児童や保護者、地域住民の反応について知りたい部分などの共有が図られた。もちろん、報告自体はとても練られていたので、理解も共有しつつ、ディスカッションが進んでいった。それぞれのグループから討議内容について、簡潔な報告を受け、それらを含めてコメントーターからまとめて講評・指導助言をいただくこととした。



グループ・ディスカッションの様子

福本昌之教授（広島市立大学）からは、主に学校経営の専門領域から岡田校長の報告について取り上げていただいた。特に、グループから寄せられた質問や意見に丁寧に答えるために、岡田校長にも前に出てもらい、即興の対話（掛け合い）を通して、実践の背景にあるものを引き出していく手法は、参加者の学びの深まりにつながったようである。「理論と実践の往還」とは言うが、研究者と実践者の言葉（理論知と実践知）の往還という表現がよりしっくりくるものであった。岡田校長としては意図して学校経営しているのだが、福本教授の問いかけに対し、実践の意味を吟味・解釈することでもっと深い言葉が導き出されたようだった。



(左)岡田校長と(右)福本教授



藤井准教授

藤井佑介准教授（長崎大学）からは、主に学級経営や授業研究の専門領域から宮重氏の報告を中心にコメントを組み立てていただいた。藤井准教授も教職大学院の院生指導をされているため、まずは全国の教職大学院の教育内容やスタイルが細部においては実に多様であることについて触れたのちに、大学を超えたこのような交流が教職大学院のプレゼンスを高めることにつながる旨の話があった。宮重氏の実践研究については、学卒院生が実習生として学級経営に参画するという、果敢なチャレンジ精神を評価したいとした。その際に「省察（リフレクション）」が鍵を握っており、宮重氏のそれまでの教育観や学級観、子供観等が、研究を通して再構成されるプロセス自体に大きな意義があると指摘した。